

6-3					
主題	利用者・職員双方に配慮した入浴環境整備への取り組み				
副題	リフト浴とウルトラファインバブル導入による生産性向上				
キーワード 1	入浴	キーワード 2	生産性向上	研究(実践)期間	9ヶ月

法人名	社福) こうほうえん	事業所名	介護老人福祉施設うきま幸朋苑
発表者(職種)	前田涼平(介護職員)、幸村優美(作業療法士)		
共同研究(実践)者	大上雪菜(介護支援専門員)、佐伯裕子(介護主任)、持吉孝郎(医務係長)		

電 話	03-5914-1331	FAX	03-5914-1350
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	平成 19 年に開設し、法人理念である地域に開かれた、地域に愛される、地域に信頼される施設をめざしている。当苑では、ICT 機器の有効的活用、エビデンスに基づく介護推進、人財育成制度、研修制度、業務改善提案制度、公益的事業といった 10 の働きがい掲げ利用者・職員共に安心できる環境作りに取り組んでいる。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

うきま幸朋苑では、ノーリフティングの理念に基づき、安全で安心な入浴支援に取り組んできた。しかし、従来の入浴設備では、重度者割合に対して中等度対応可能な浴室形態数が不足していたことから、適切な浴室選定が出来ず、結果として入浴介助時間の増加につながっていた。さらに、移乗介助や洗身介助時には職員の精神的・身体的負担が大きく、利用者からも「怖い」「安心して入れない」といった不安な声が聞かれた為、利用者・職員双方にとって、より安全で安心できる入浴環境の整備が必要であると考えた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

事前調査から“洗身”の負担が職員・利用者双方に挙げられていた。そこで狭いスペースでも活用可能なシャワーキャリー・リフト浴(以下リフト浴)とウルトラファインバブル(以下UFB)機能付き入浴設備を導入した。UFBによって洗身工程を簡略化し、浴槽内での洗身を可能とする事で、職員の身体的負担軽減、衛生面向上、利用者満足度向上に繋がると考えた。今回、導入による職員・利用者双方の満足度および入浴介助効率への効果を報告する。

《3. 具体的な取り組みの内容》

対象期間は令和 7 年 4 月から令和 8 年 1 月までの約 9 カ月間とした。対象者は 2 つのフロア計 4 ユニットとし、利用者 38 名、職員 19 名を対象とした。

導入前はチェアインバス・浴槽昇降浴を使用していた。今回リフト浴と UFB を導入し、利用者の動作能力や指示理解に応じたフローチャートを作成した。歩行可能な利用者は一般浴、立位保持可能な利用者はリフト浴、立位困難な利用者は臥位浴への振り分けを行った。

UFB は微細な泡が毛穴や皮膚の細部に入り込み、汚れを浮かせて洗浄する特徴があり、浴槽内での洗身を行い、こすり洗いは最小限の部位のみとした。

導入前後で以下の項目を比較した。

- ① 入浴時間 ②職員負担のアンケート ③浴室選定の適正率 ④利用者の反応・満足度

《4. 取り組みの結果》

- ① 入浴時間は導入前と比較し約 5 分短縮された。特に UFB 導入によって洗身工程が簡略化され、浴槽内で洗身できるようになったことが時間短縮に繋がったと考えられる。
- ② 職員アンケートでは導入後に腰部負担軽減を実感する声が増加した。リフト浴によって移乗動作や姿勢保持が機器で補助されることで、身体的負担軽減に繋がったと考えられる。
- ③ 浴室選定の適正率は 84%から 100%へ改善した。導入前はチェアインバスが適している利用者が浴室の稼働状況の影響により浴槽昇降浴を利用せざるを得ないケースもあったが、リフト浴導入によって選択肢が広がり、利用者の状態に応じた適切な浴室選定が可能になった。
- ④ 利用者の状態に応じた適切な入浴環境を整える事ができた。利用者からは「暖かい」「昔みたいにに入れて嬉しい」といった前向きな声が聞かれた。

《5. 考察、まとめ》

厚生労働省「介護分野における生産性向上ポータルサイト」¹⁾において、介護の現場では人材不足が進む中、限られた人員で質の高いケアを提供するための業務改善が求められている。

本研究では、入浴機器の変更により入浴時間の短縮に成功し、UFB 併用により洗身介助の負担軽減、洗身時間の短縮による効率性の向上が認められ、リフト浴の有効性が示される結果となった。入浴後の爪切り・着替えにも余裕が生まれ、ご利用者の満足度に繋がったのではないかと考える。

従来の入浴では 6 名が週 2 回、本人に適していない浴室を使用する必要があり、職員負担が生じている状況であった。今回、本人に適した浴室選定率 100%になった事により職員の精神的・身体的負担が軽減し、双方によりよいケアに繋がった。

今回の取り組みはケアにかかる時間の削減、職員負担の軽減、ケアの質が保たれ利用者の満足度も高い状態となり介護の生産性向上の取り組みとして一定の成果をあげることができた。今後の課題として腰部負担効率には 30%~80%と個人差も見られ、今後は継続的な検証が必要である。今回の研究では対象としていなかったが、入浴手順の簡素化によって新人職員やグローバル職員でも理解しやすい環境になっている。指導にかかる時間が削減され、スムーズにケアを行えるようになることで、更に介護の生産性向上に繋がることが考えられる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- 1) 厚生労働省「介護分野における生産性向上ポータルサイト」

<https://www.mhlw.go.jp/kaigoseisansei/what/productivity.html>, 2026.5.23 閲覧

《8. 提案と発信》

今回の取り組みは職員・利用者双方によりよいケアに繋がり、介護の生産性向上の取り組みとして一定の成果をあげることができた。今後入浴介助以外の項目についてもケアの質を保ちつつ業務の効率化を図っていきたい。